

特集 草創期の日本YWCAと河井道ものがたり (前編)

- 4-5面 続けよう! 私たちのピースアクション
6面 私らしい国際協力をみつけよう!
7面 3市YWCA共同企画「命どう宝」レポート

The Young Women's Christian Association

YWCA

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

2

FEBRUARY 2016 No.730

www.ywca.or.jp

草創期の日本YWCAと河井道ものがたり

汝の光を輝かせ



第8回夏期修養会の指導者たち。河井道(前列左から3人の中央)、広岡浅子(中央の洋装)、マクドナルド(後列左から3人目と装)らが一堂に会した(1913年)

NHKの朝の連続ドラマ「あさが来た」のヒロイン広岡浅子が、晩年日本YWCAの中央委員となり大阪YWCAの創設に尽力し、また夏期修養会に毎年欠かさず出席して、若い女性たちを励ましていたことを存じだろるか。日本YWCAには、浅子のように近代の日本を切り拓いた数多くの女性たちが参加していた。彼女たちを引きつける魅力はどこにあったのか。その答えを探るため、前後編2号にわたり、日本人初の総幹事として日本YWCAの礎を築いた河井道という一人の女性の歩みを軸に、草創期のYWCAに光を当てることにしよう。そこで、当法人代表理事で河井道を研究している石井摩耶子さんに、執筆をお願いした。日本YWCA創立111周年、激動の今日を生きる私たちが、河井道の歩みと草創期YWCAの精神に改めて学ぶことの意義は大きいと思われる。

生きる勇気を養う心の教育

幼少期の河井道は、広岡浅子とは違って引つ込み思案のおとなしい子どもだったようだ。1877年に伊勢神宮の神官の家に生まれたが、明治政府の緊縮政策により父は神官の職を失い、道が10歳の時に一家は新天地を求めて北海道の函館に移住した。生活の激変のために、ますます引つ込み思案で無口になった。そんなとき、道は、函館でアメリカ人女性宣教師サラ・スミスに出会う。編み物や英語を教えてくれる優しい「スミス先生」に心を開いた道は、スミスの赴任先である札幌について行き、数人の少女とともに彼女の自宅に寄宿して学ぶことになる。スミスに喜ばれた一心で先生の発音と抑揚を真似して大声で英語のリーダーを読むと、褒められて自信が付き、道は日毎に快活な少女になっていった。スミスは、敷地の一角で生徒たちに草花を育てさせ、自然の偉力と脅威について教えた。「頭の教育だけでなく心の教育を忘れてはいけない」それがスミスの持論だった。またスミスをはじめ、女子教育に新風を吹き込んだ宣教師たちの開拓者精神は、その後の道の活動に大きな影響を与えることになる。

新渡戸稲造の教え

スミスの女学校(後の北星女学校)には、札幌農学校の教師たちが教えに来ていた。新渡戸稲造もその一人だった。新渡戸は早くから道の才能に気づき、後年、北星女学

エンパワーするNGO



- ご協力ありがとうございます
賛助費
望月和子 辻井夏子 白木原暁子 辻 加代
鈴木 榮 江尻美穂子 寺嶋公子 石井寛治
石井摩耶子 安田寛子 岩田陽子 谷山久美子
田中蘭子 浅川敬子 小野寺富子 西田健二
桐村巨子 木田みな子 小川郁子 小泉迪子
近藤真由美 汐崎康子 白田治子 大澤恵美子
鈴木俊子 一杉静子 伊藤いく代 岩崎妙子
江副史子 布村美弥子 長 清子 土居松枝
高岩由美子 野崎昭弘 川上静子 伊藤富美子
仙波容子 篠山淳子 中山美津江 益田明美
秋元靖子 八重樫照代 牛島栄子 梶山順子
三股まさ子 本城智子 尾崎敦子 五十嵐和子
板橋幸子 板橋章一 木下由美子 阿部有三
小谷充子 山本貴美子 谷山幸子 眞野あや
朽木美奈子 甲子敏江 西島 黎 手島弘美
宮澤玲子
東京YWCAお弁当とお菓子作りの会
ピースメーカーズ基金
(平和を創り出す女性のリーダーシップ養成)
白田治子 鈴木俊子 三股まさ子 川上静子
原美左恵 鶴崎祥子 久我輝子 桑みち代
吉田亜希
東京女子大学
女子聖学院中学校・高等学校
特定非営利活動法人東京YWCA福祉会
長崎YWCA
甲府YWCA
(ネパール大地震被災者支援基金)
熊本YWCA
(オリブの木キャンぺーン基金)
西なお江 岩田陽子 木田みな子 岸岡芳美
堀部 碧 森川恵美子 荒井重人 井出 都
伊藤いく代 小泉迪子 白田治子 横山千枝子
鈴木俊子 桑原貴子 榎本みつ枝 野崎昭弘
関むつみ 伊藤まさ子 花盛静子 小淵真理
市川真美恵 田中長明 田中 甫 富岡美知子
天野直子 梶山順子 三股まさ子 田林綱紀
板橋幸子 木下由美子 板橋章一 小谷充子
清水 南 甲子敏江 野島美佳 井原圭子
久我輝子 桑みち代 野澤節子 布村耐子
小宮山栄 林育二郎 野々村輝 月原綾子
Rupert E. Martin
東京YWCA聖書を読む会
長崎YWCA
(東日本大震災被災者支援基金)
(ベチリボンキャンぺーン)
辻井夏子 石井寛治 石井摩耶子 田中蘭子
谷口道子 木田みな子 石川松子 井出 都
伊藤いく代 高橋 馨 森田矩子 榎本みつ枝
白田治子 鈴木俊子 市川真美恵 一杉静子
渡辺文子 高岩由美子 江副史子 森 晶子
中山美津江 丸田昭江 牛島智子 八重樫照代
野崎昭弘 川上静子 高橋りえ子 関むつみ
仙波容子 宇都宮芳子 瀬川信子 毛利亮子
三股まさ子 依田良子 桐原章子 山本貴美子
濱田映子 河野章子 朽木美奈子 小谷充子
杉原壽子 斎藤裕子 後藤麻衣 甲子敏江
星野花枝 安江恵津 久我輝子 桑みち代
梅本弘子 井原圭子 野澤節子 伊藤悦子
宮澤玲子 小宮山栄 田中蘭子
東洋英和女学院中高部宗教委員会
捜真学院
東洋英和女学院同窓会
日本基督教団市川三本松教会
一般財団法人長崎YWCA
長崎YWCA
甲府YWCA
新潟YWCA
生田教会カナの会
世界YWCA総会派遣基金
東京YWCA有志
(2015年10月16日〜2015年12月15日現在
敬称略)

種

「主が遣わすメシア(救い主)に会うまでは決して死なない」
聖霊によって約束されていた老人シメオンと、結婚して7年
で夫を亡くしいつも神殿で祈りを捧げていた84歳になるアン
ナは、長い間救い主を待っていた。ある日、生まれて間もな
いイエスを抱いたマリアとヨセフが神殿に詣でたとき、多く
の人が行き交う雑踏の中で、シメオンとアンナだけが、この
若い家族を見出すことができた。キリスト教の暦では、2月
2日を「被献日(ひけんび)」と称し、幼子イエスとその両親
の神殿詣の出来事を記念して祝う。赤ちゃんのイエスが登
場するため「クリスマスのお祝いはこの日まで続く」と説く
人もいる。降誕の夜に飼葉桶で眠るイエスを訪ねた羊飼いで、
東方の博士たちに続いて、幼子イエスに会えた2人の老人の
存在は、確かに2月に祝う大切なクリスマス物語の一つだ。
シメオンとアンナが長い年月、信じて祈り、待ち続けたか
らこそ、救い主に出会えたこの物語から、私は現代でも多く
の「待ち続けている人々」がいることを思い起こす。
「この日を待っていた!」。全米でも多くの同性愛者とその
支持者たちが歓声をあげて祝ったのが、昨年「同性愛者の結
婚は合憲」と米国の最高裁判所が判決を下した日。「これで
やっと」市民として生きていける「胸をはって husband/
wifeと紹介できる!」偏見と差別に多くの悲しみの
涙が流された長い年月を経て、歓喜の涙が流れるように流され
た日といっても過言ではない。数えきれない多くの運動や働
きがあった「この日」だったが、希望に裏付けされた人々
の「待つ」力がこの日をもたらしたと、私は信じている。偏
見と差別、抑圧と暴力の支配するこの世界で、今も救いへの
確かな希望を持ち「待ち続けている人々」に思いを寄せたい。
景山 恭子
米国聖公会ニューヨーク教区

校の教師となった道に、アメリカ留学の奨学金申請を薦めたのである。それは、日本の国費留学生だった津田梅子が、日本の若い女性にアメリカ留学の機会を与えるために作った奨学金だった。一度は断った道だが、結局、1898年の夏、奨学金を受けて新渡戸夫妻と共にアメリカへと旅立った。21歳のことである。

寄港地バンクーバーのホテルで、窓から街灯に照らされた美しい夜景に見とれていたとき、新渡戸は道に言った。「街灯が街全体を照らしているこの街と、暗い夜道を一人ひとりが提灯を持って歩くので溝に落ちたりする日本とを比べてごらん」と。みんなが力を合わせて街を明るくする、それが「協力」というものであり、それを学べる場所は本や学校の壁の外にあるのだ。さらに、市井の片隅でも偉大な人々と出会えること、またキリスト教の大きな働きは、一人ひとりの人格を、社会の階級にかかわらず成長させるところにあることを説いた。この夜の新渡戸の言葉は道にとって「決して忘れられない教訓」となった。

**アメリカで
草の根の民主主義を体験**

道は、フィラデルフィアのプリンマー大学で学びながら、新渡戸の助言のとおり「学校の壁の外」で多くの人との出会いを楽しんだ。1902年の夏、ニューヨーク州ジョージ湖畔シルヴァ・ベイで開かれた学生YWCA協議会(修養会)に招かれた経験は、その後の生涯を決定づけるものとなった。新渡戸から聞いた「協力」の実践

を目的にしたりしたのだ。全国の30の大学から集まった400人の女学生たちは、学校の枠を超えて大学生活の改革や社会問題について自由に話し合い、会の運営のために協力し合っていた。

ある日の夕べの祈祷会で、一人の女学生が「卒業後わたしは中国に行くつもりです。なぜなら『世界がわたしの働き場』なのですから」と目を輝かせて語るのを、驚きをもって聞いた道は、自分の目の前に新しい広い世界が開けていくのを感じた。「わたしは日本人であるばかりでなく、世界、すなわち神の世界にも属するものだということを悟り始めた」と、後年、自伝に書いている。道はこのような機会に恵まれていない日本の少女たちのために、自分を用いてほしいと神に祈ったのであった。

誰かが開拓者にならねば

その頃、急速な工業化が進む日本の紡績工場などで働く少女たちは、劣悪な労働条件の下で悲惨な生活を強いられていた。心を痛めた外国人女性宣教師たちは、ロンドンの世界YWCA本部に手紙を書き、日本



アメリカ留学から帰国した頃の河井道



初代の日本YWCA総幹事
キャロライン・マクドナルド

にもYWCAをつくってほしいと訴えた。1900年に初代世界YWCA総幹事レイノルズが来日し、それを契機に、女性宣教師や津田梅子らによる創立準備会が発足。2年後、第2回世界YWCA大会は、中国と日本でのミッション推進を協議し、翌年にはアレサ・モリソンが、続く1904年にはカナダYWCAからキャロライン・マクドナルドが日本に派遣されてきたのである。マクドナルドは、あのシルヴァ・ベイでの夏期協議会で河井道に出会い、「最高にすばらしい若い女性の一人」と評価していた。そこでアメリカ留学から帰り津田英学塾教授となっていた河井道を説得してYWCA創立委員に加えた。27歳の道はボランティアとしてこの冒険的な仕事の意義を心から信じ、教鞭をとる傍ら余暇のすべてを捧げて働き始めた。このような決断の背後には、「誰かが開拓者にならねば」との思いがあった。道もまた、来日した宣教師や世界YWCAの指導者ら「開拓者」の後に続く歩みを始めることになったのである。1905年9月、創立準備委員会は中央委員会に改組され、マクドナルドは初代総幹事に任命された。ここに、日本YWCA

**1910年の
世界YWCA大会の意義**

ベルリンで開かれた第4回世界YWCA大会は、世界のYWCA史上、建設期から確立期に入る画期的な転換点になった。遡ること12年前、第1回大会で組織の名称を「世界YWCA」と決定した。YWCAの運動が国境を越えた一つの世界運動だという共通理解に立ったからである。しかし、実際には欧米諸国の指導で動いてきた。そこに、欧米YWCA指導者(幹事)の派遣先であるアジア、その東の片隅の、加盟後わずか4年の日本YWCAから、河井道が伝道部委員会委員長に選ばれ、ロンドンに滞在して準備した報告書を大会に提出し、

大きなスピーチをしたのだ。「世界YWCAの歴史」の著者アンナ・ライスは、道の写真を載せ、大会での活躍を伝えている。それは、世界YWCAが今や名実ともに世界的な組織となった証であった。

日本人初の総幹事の誕生

会議を終えた道は、カナダとアメリカ各地のYWCAに招かれ講演や視察をした後、1911年に帰国した。YWCAについて熟知し、なんでも説明できるようにになっていた。翌年、日本YWCA総幹事選定委員会は、35歳の河井道を最初の日本人総幹事

は正式に発足し、マクドナルドと道の二人三脚が始まった。女子学生のための聖書研究や英語のクラスを開き、当時東京で不足していた女子学生のための寄宿舎を借家ながらも開設した。「次は何をやりましょう」とマクドナルドが問いかけると、道は即座に「夏期修養会を」と答えた。シルヴァ・ベイでのあの経験、あの喜びを日本の女学生にも体験してほしい、という願いが、ついに実現することになる。

第1回夏期修養会は、この翌年の7月に青山女学院を会場に5泊6日で行われることになった。しかし、マクドナルドは、パリでの第3回世界YWCA大会(総会)で日本YWCAの加盟承認を得るため、また寄宿舎事業の募金をヨーロッパで集めるために、4月に日本を立ち半年近く留守だった。道は準備から実施に至る責任を背負うことになったが、自分の夢が実現する喜びと、日本で初めて全国の女学校の学生達が一堂に会し集会をするのだという誇りに胸を踊らせていた。不慣れた道に牧師や宣教師、YMCA指導者などが協力して大成功をおさめ、5泊6日の日程に30を越える女学校から143人の参加者があった。これまで自分の意見を発言する機会がなかった日本の少女たちは、ここで大いに語り、笑い、歌ったのである。夏期修養会は、その後は戦時下に中断したが1969年まで続くことになる。

世界の仲間との協働の喜びを知る

マクドナルドは日本に戻るとすぐに、

に推挙した。外国人と日本人の2人総幹事体制となった。最初は津田英学塾講師と総幹事を兼務したが、4年後には教職という安定したポストを投げ打って、専任の総幹事として未知の分野に踏み出した。今や本格的に「新しい分野の開拓者」となる決意をしたのである。この道の決断の背後には「日本YWCAは、できるだけ早く日本人の手で運営されるべきだ」と考えていたマクドナルドの熱い祈りがあったことを忘れてはなるまい。

道は総幹事を引き受ける際に、自分の給料は外国からの援助に頼らず、日本のYWCAの会員によって支払っていただきたいと願った。それが日本YWCAの自立への第一歩だと考えたからである。さっそく募金活動が始まり、少女たちはピンナッツを売ってわずかの資金をつくった。女性実業家として名を馳せていた62歳の広岡浅子は、道の志に共感して100円を寄付した。高等小学校の女性教師の平均月給が約15円の頃のことである。会員たちのこのような行為は、道をどんなに勇気づけたことだろう。こうして日本YWCAは、創立7年後にして、自立への困難な歩みを始めたのである。

次号へ続く

恵泉女学園大学名誉教授 石井摩耶子



夏期修養会で語り合う女子学生たち(1913年)

汝の光を輝かせ
草創期の日本YWCAと
河井道ものがたり



〈おもな参考文献〉
河井道著「わたしのランタン」(新教出版社、木村恵子著「河井道の生涯」(岩波書店)、Mフランク著、島海百合子訳「東京の白い天使」(教文館)、日本YWCA編「水と風と光を―日本YWCA 80年―」(日本YWCA)ほか

↑ 賜物を活かした多彩なアクション

函館 YWCA

多様な団体と共に継続的に活動

函館YWCAは多様な団体と共に「レッドアクションin函館」の主催委員会に名を連ね、継続的な活動を行っている。雪の降る12月に開かれた大集会では、会員のリードで「ミルク世・チュクラナ・ウチスリティ」（沖縄の言葉で、人々が豊かに、平和に暮らせる世の中を皆でつくろう！という意味）を合唱してアピール。また、平和を訴える静かな語りかけが共感を呼び、平和活動に関心を持ってもらえた。



大阪 YWCA

戦争を語る58人の声を記録

12月に『戦後70年によせて-20歳から94歳までの声』を出版した。制作期間は約1年半、費用はクラウドファンディングを利用して1か月で目標金額25万円を上回る28万8000円を得た。大阪YWCA会員を中心に他の地域YWCA、教会関係者など58人が寄稿し、戦争体験や平和への思いを語ってくださった。この冊子が戦争の現実と向き合い、真の平和のために何をすべきか考え、行動するきっかけとなれば幸いだ。



小さくても発信し続けること

私たち静岡YWCAは小さな団体だが、知恵と持てる力を出し合っ てアクションを続けている。独自の取り組みとしては、公共施設で開催した、被爆体験の絵画展や沖縄の現実を紹介する写真展、南京大虐殺の真実を伝える映画上映会など、市民の方々にわかりやすい仕方でアピールしている。一番の誇りは会員たちが手縫いした憲法タペストリーだ。これまで9条と97条を制作したが、この夏は新たに、戦争放棄を誓った憲法前文の絵文字タペストリーが加わった。子どもたちにも理解できるようにと、母親たちが一針一針、心を込めて縫い上げたのだ。ピースフェスティバルなどで展示したことから注目を集め、地元でも話題となった。

他団体との協働も欠かせない。静岡YWCAが呼びかけ人の一端

東京 YWCA

国会議事堂前で緊急アクション

「戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会」の呼びかけに応じて、「戦争法案に反対する国会前緊急行動0830」を実施した。小雨が降る8月30日、多数の会員有志が国会議事堂前に駆けつけて、「国会10万人・全国100万人大行動」のデモに加わり、安倍政権退陣と戦争法案の廃案の声をあげた。これを機に、2000万筆の統一署名につながった。



福岡 YWCA

1日丸ごとPEACE館

平和な社会について考え、行動につなげるためのイベント「1日丸ごとPEACE館」を開催。「突き進む“戦争する国”づくり～新安全保障法制の狙うもの～」と題した講演会、戦争と沖縄の真実を学ぶ勉強会や関連映像の上映会を行った。カフェでは沖縄弁当など手作りの食品を販売して、親しみやすく間口を広げた。YWCAをご存じなかったグループや個人の方と交流がもて、その後の勉強会への参加者が増えた。



を担って始めた交流会が、県下50余りの団体による「浜岡原発の再稼働を許さない静岡県ネットワーク」に発展し、県内一斉署名運動につながった。こうした下地があったことから、「静岡総がかり行動」が実現し、デモ当日は1500人以上の市民が集結した。終了後の総括会では、安保法制が廃止されるまで続けていくことを確認した。小さくても、発信し続けることで他団体とつながり、大きな行動へと広がることの一役を担っていると信じている。静岡YWCA会長 藤原玲子

YWCAだからこそ できることがある 続けよう！ 私たちの ピースアクション

ピースアクション。
YWCA運動の重要な使命(ミッション)の一つだ。
平和な社会を実現するため、それぞれの地域で、
多くの会員たちが力を合わせ、思いを込めて活動してきた。
しかし日本は戦後70年にして安全保障関連法が可決され、
かつてない危機的な状況に立っている。
今こそ、YWCAだからこそ、できることがあるはずだ。



↑ みんなの手と手をあわせれば 参議院選挙を見据えてできること

新たな希望が芽生えている

安全保障関連法(以下:安保法)が参議院本会議で可決、成立したが、反対運動のうねりから新たな希望も生まれている。一つは、抗議デモや集会など選挙以外の方法で民意を表明する「カウンター・デモクラシー」の台頭。もう一つは、これまで細分化・分断されてきた平和運動の連帯の動きだ。学生団体SEALDs(シールズ)をはじめとする若者たちの活動に刺激を受け、これまでデモや集会に参加したことのなかった若い世代や、子育て中の母親などのグループが次々に結成され、全国に波及した。国会前デモでは各グループが協力し合い、野党党首が揃って参加するなど「野党共闘」を後押しした。各地域YWCAでもさまざまな抗議活動が行われた。日本YWCAも政党への抗議FAX送付の呼びかけやデモ用プラカードの作成、安保法への抗議声明送付などを実施した。

同法の廃止、違憲確認を求める訴訟が既に始まっている。私たちにもできることはたくさんある。憲法9条を守るために毎月9日に行われる「9の日行動」のほか、「アベ政治を許さない」ポスターの掲示や街頭行動、憲法に親しめる「憲法カフェ」などの学習会への参加、統一署名の呼びかけなど、従来の活動を継続することももちろん必要だ。

変革をもたらす小さなアクション

鍵となるのは、18歳選挙権が導入される夏の参議院選挙(衆参同日選の可能性も)に向けたアクションだろう。投票の判断材料として、安保法採択時の議員の投票行動が分かる「国会議員いちらんリスト」や脱原発を実現できる候補者を選ぶWebサイトなどで情報収集ができる。男女平等政策をもつ議員を応援するのもよいだろう。

政治・選挙に関する高校生向け副教材で、インターネットから閲覧できる『私たちが拓く日本の未来—有権者として求められる力を身に付けるために』(総務省・文部科学省)を読むのもお勧めだ。早くも憲法改正国民投票を解説する章が含まれているが、参議院選挙の先を見据え、国民投票の仕組みや国家緊急権などについても学んでおくことも大事だろう。憲法チームでも今後、若者に選挙への参加を呼びかけるFacebookキャンペーンを実施し、主権者教育の「出前授業」の可能性を探る予定だ。

全国に広がる地域・中高YWCA、そして世界120カ国以上のYWCAにネットワークを持つ強みを活かし、また他団体とも連携して、安保法廃案に取り組んでいる姿勢を外部に示すことが大切だ。ひとりの小さな手では何もできなくても、みんなの手と手をあわせれば変革をもたらすことができると信じている。

日本YWCA憲法チーム 長 吉田亜希

お役立ち情報サイト

国会議員いちらんリスト
<http://democracy.minibird.jp/>

脱原発政治連盟
<https://ryokuchakai.wordpress.com/>

総務省
『私たちが拓く日本の未来—有権者として求められる力を身に付けるために』
http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/senkyo/senkyo_nenrei/01.html

女性議員を増やす
「JG83 参院2016 キャンペーン」
<http://www.coco-vote.com/>



いつでもどこでも始められる
「私」らしい国際協力をみつけよう！

私らしい国際協力〜国際NGOはじめての一步講座〜

「国際NGOのボランティア活動をやってみたくけれど、どこから始めるのかわからない」「より良い社会をつくるために支援力を身につけたい」といった方を対象に、日本YWCA人材養成部会では、2013年から「私らしい国際協力〜国際NGOはじめての一步講座〜」を実施してきた。初心者のスタートを支える、その取り組みを紹介する。

女性たちの
リーダーシップ育成のために

国際的に活躍するNGO団体の多くは、目的が1本に絞られて活動内容もわかりやすいものですが、YWCAは全国の地域YWCAを拠点とした活動が多岐にわたっています。そのため、団体として何を指しているのかわかりにくいと言われることがあります。そこで、日本YWCA人材養成部会では、私たちの活動目的は「女性たちのリーダーシップ育成」であると明確に位置づけ、女性がより積極的に自らの道を切り拓き、自分らしく社会参画をするのに必要な力を養う「女性のためのエンパワメント講座」の一環として、国際NGOのボラ



画像を使いながら、分かりやすいトークを展開する吉野華恵さん



講師を囲んで意見を交わす参加者たち

ンティア活動と出会う連続講座を企画し、開催してきました。最初の2年間は東京都内で行っていましたが、昨年から地域YWCAと合同開催として地方での開催を実現。6月には、新潟市内の公共ホールに、佐々木寛さん（日本平和学会会長・新潟国際情報大学国際学

科教授）を講師に招聘して、「あなたの前に広がる世界〜市民による国際協力〜」をテーマに語っていただきました。YWCAのキャッチフレーズに用いられている「エンパワー」の本来の意味は、みんながよくなること、連帯であること。弱い立場におかれた人たち同士が手をつなぐことから、私たちは社会を変え、世界を変えていくことができる、という示唆をいただきました。また10月には、山梨英和中学校・高等学校のチャペルで実施。吉野華恵さん（同校・社会科教諭）が、JICA青年海外協力隊・村落開発普及員としてのマ

ラウイ国での活動に、教員を休職して参加した動機や現地での2年間の活動経験をお話しくださり、「20代に海外へ飛び出せ。語学力だけではなく趣味や特技を磨こう！」「今日が一番若い日、したいことはなんでもすること」、さらに「大海も小さな水の一滴からです」と参加者に激励をいただきました。

横浜・湘南・平塚YWCA共同企画
「命どう宝〜命こそ宝〜」レポート
音楽と共に 沖縄の今に
思いを馳せる

2015年11月7日、横浜・湘南・平塚YWCA共同企画「命どう宝〜命こそ宝〜」が開催された。沖縄を中心に活躍する若手ミュージシャン「2源色（ニゲンシキ）」と「ウエチマサシとナカノユメ」による演奏と、沖縄出身の平良愛香牧師（日本キリスト教団三・一教会）が語るメッセージを聴きながら、来場者たちは「沖縄の今」に思いを馳せた。

「沖縄からの問い」を
私自身の問題に

「沖縄から問いを突きつけられていることを受け止める」と同時に、「一緒に喜びを分かち合いましょー」平良愛香牧師から投げかけられたメッセージは、まさに今回の集いを象徴するものだった。

きっかけは、2015年2月に行われた日本YWCA主催の「YWCAフェスタ in 沖縄」。交流会でナカノユメさんと



左からナカノユメさん、「2源色」マサキさん（手前）、ウエチマサシさん

源色の演奏に胸を打たれたという、横浜YWCA会員の発案だった。「この音楽を本土の人々にも聴いてほしい。そして沖縄の今を共に考え、痛みを分かちあいたい」その思いに賛同して二つ返事で引き受けてくださった出演者の方々、そして準備に携わった多くの会員の働きが実を結び、当日は130人以上の来場者で賑わった。コンサートは、沖縄の海や風、人々の息づかいを感じるウエチマサシさん撮影の写真を背景に、ナカノさんの琉球横笛とウエチさんのアコースティックギターによる、穏やかな美しい演奏で幕を開けた。後半は2源色のラップ・まさきさんが加わり、雰囲気が一転、にぎやかなライブとなった。

「ラップは初体験」という方も少なくなかったようだが、手拍子や合の手を入れながら、エネルギーいっぱい時間を楽しめ、会場が一体となって温かな時間を共有することができた。

平良牧師は「沖縄の今」と題して、「日本」の安全保障のために沖縄に多くの負担や痛みが押し付けられている現状を語ってくださった。本土では報道されることのない、基地移設反対運動の参加者が暴力によって命の危険にさらされている辺野古の現状や、「沖縄は大変ですね」という言葉が表す本土の人の沖縄や政治への関心の無さといった問題が、沖縄の歴史と共に示された。本土で暮らす私たちのあり方が問われた。

また、「東京にいて一体何ができるのか？」という会場からの質問に対して平良牧師は、国会前でも辺野古の基地移設反対デモが行われている例を挙げながら、「政治の中心地である東京だからこそ、できることは大きい」と答えてくださった。

この集いに参加して、音楽や座り込み、デモや身近な人との議論など、一人ひとりができる闘い方はさまざま、どれも意義があるのだということに改めて実感した。「沖縄からの問い」を自分の問題として考え、行動していきたい。

横浜YWCA会員
堀添里緒

Voice

沖縄は基地があり、それに県民が反対している。それはなぜか、答えをお持ちだろうか。そしてその問いかけに、応える術を。

沖縄は今、いや、もっずつと命を守る闘いを続けている。第二次世界大戦中の地上戦は言うまでもなく、日本本土が戦後と呼んだ頃から今まで戦争のただ中にある。「基地がある」ということは、戦争に加担していることである。殺される側にとって、沖縄や日本が望んだものかどうかは、関係ないのだから。新たな基地を拒否すること、それは「殺す側（加害者）にも殺される側（被害者）にももう一度となるまい」と誓った沖縄の人の意思であり、人間としての最低限の尊厳を守る決断である。基地建設予定地の辺野古では、土器・石器が発見され文化財に認定されている。今まで沖縄が歩んだ歴史を証言し、ここは人殺しの場所ではないと、訴えているかのようだ。

想像してほしい、重装備の海上保安庁の船が小さな船に追突し、乗り込んできて、無防備の市民を羽交ひ締めにし、意識を失わせている光景を。それを無表情で見つめる彼ら。座り込みをする市民を人形のように引きずり、不当逮捕を繰り返す。まるで戦争中の「非国民」を扱うように。それが毎日、目の前で繰り広げられているのだ。

それは、沖縄だけに留まるはずもなく、日本本土へと派生している。彼らの正義は「国の維持」。国とはなにか、国民とは誰か、地方が国家権力と対等に対話できない国が果たして正常な国と呼べるのか。沖縄にかかる問題は、日本の国権力の暴力性と外交技術の未熟さを露呈している。日本は民主主義の国として危機に瀕している。平和憲法のあるこの国を守る術は、現実の沖縄と向き合い、寄り添うことにあるのではないだろうか。

琉球横笛奏者 ナカノユメ

私らしい国際協力
〜国際NGOはじめての
一步講座〜

開催・募集案内は
下記サイトで公開します。

<http://www.ywca.or.jp/whatwedo/empowerkouza>

それぞれの講座の後に、参加者のフォローアップを含めて次回講座を企画しています。内容は、昨年10月にタイで開催された世界YWCA総会に参加した大学生からの報告を中心に、世界につながる日本のYWCAの活動紹介、意見交換、交流会を行います。

誰にとってもはじめての一步は、恐るおそる踏み出すものですが、そのスタートを私たちは支援します。たくさんの「初めて」が、私たちの歴史と実績として積み重ねられています。次はあなたです！私たちと一緒にエンパワーしませんか。

日本YWCA人材養成部会
長 藤谷佐斗子

はじめての一步を踏み出そう

た。いずれの講座も地域の大学生や中学生が参加。真剣に耳を傾けている姿、真っ直ぐに講師を見つめる熱い視線が印象的でした。参加者からは「他者のために生きることの楽しさを教えられた」「NGOを身近に感じる事ができた」「YWCAの活動の幅広さを知った」といった感想が寄せられました。